
ポーカーフェイスな彼

ウェンズデー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポーカーフエイスな彼

【Nコード】

N7409Y

【作者名】

ウェンズデー

【あらすじ】

「僕に興味を持たせた君が悪いんです。」学年一のモテ男に目を付けられた杏。大嫌い、大嫌い！なのに、何時の間にか振り回され気味に……。ドSなイケメン君×超恋愛ベタな少女
どうなっちゃうのおおー！！！！

白石くん

「いや、絶対やめた方が良い。」

昼休み、中庭の日当たりの良いベンチに腰掛け弁当を食べる長谷部杏は友人鈴木玲にそう言い放った。

「ええー！？だって、あの白石君だよ？いいじゃん！」

「あの女つたらしだけはやめときな。」

玲の恋愛相談に鬱陶しそうに言い返す。クラスの人にはまたかよ…と思われるこの会話。玲は恋バナが大好き。私以外にも色々な人に相談している。

…はい。違う話題がいいなあー。さっさと終了させて、こないだのサッカーの話題にうつらせてくれ。

私の心からの願いが通じたのかそれ以上は触れてこなかった。一瞬の沈黙。

「あつ！あと五分で昼休み終わりじゃん！ごめん、私トイレ行ってくる。先帰ってて！」

触れてこなかったのではなく、時間の確認をしづらい。

ああ、終わっちゃったよ。せっかくの昼休み。走っていく玲を少し恨む。やがて自分のクラスへ戻ろうとベンチから立ち上がる。

「そんなに僕のこと嫌いですか？」

「……」

後ろから、背筋が凍りそうな冷たい声が聞こえた。しまった。

…この声は、白石。

振り返ってはダメだ。杏。前進しろ。脳に本能がそう語りかけ、前
に出る。

「返事して下さいよ。」

さっきより声が近くで聞こえるのは気のせい？

「返事しないとキスしますよ？」

「はあ！？」

「冗談ですよ」

イラッときて振り返る。整った顔が目の前にあった。

「……？」

白石裕也。常に無表情なその顔は凄まじい程整った顔立ち。少し癖のある黒髪に女の子顔負けの美白。黒縁メガネに大きな黒目が特徴の澄んだ瞳にはどれだけの少女が落とされてきたか。

クラス、いや、学年一の美貌をもったこの美少年には様々な伝説がある。

キスすれば本命、生まれてから敬語以外で話したことはない、現在20股をしている……などなど数え切れない。

「なにボーッとしているのですか？そんなにカッコイイですか僕のこと。惚れちゃいましたか。」

無表情のまま彼がとんでもないことを言ってくる。

「うつさい。あんたみたいな人に惚れるわけないでしょ！生まれて一度も恋したことないんだから！そんな軽い女じゃありません！」

「恋したことがない。はあ。だからですか。なるほど。」

必死に言い返すが全く効果なし。それどころか、あげ足を取られた気がする。

キンコーン…

「あつ！しまった！鐘がなっちゃったじゃん！！」

こんな奴にはかまっでられない、教室に向けて全速力で走り出す。

もう！！

—

その時…

「…そろそろ始めますか」

そう呟かっていたとは知るはずもなく。

白石くん（後書き）

今晚は。 m（――） m作者のウェンズデーです。

見てくださってありがとうございます。これからもノロノロ更新しますのでもよろしく願いします。

資料室

ああ。ぜんっぜん集中出来ない！

なんなの！？あいつ。いきなり話しかけてきて。モテるからって調子にのってさあ。

五時間目は数学。先生は口をパクパクさせて説明している。いつもならスラスラ入ってくるのに今日はまるでダメ。

すべてはあいつのせい…

男に話しかけられるなんてほとんどないんだもん！

一人頭のなかで嵐を起こしていると、背中がチクツとした。

…いつ。痛いっ！なに？

さつと後ろをみる。すると、ほとんどの人が黒板を見る中で一人だけこっちに目を向けている奴がいる。

あれは…

美白に黒縁、黒髪。白石だ。あいつ！ニコリともせずこっちを見て。

気持ち悪いっつーの！！

思わず舌を出す。ペロッ。

：

全く表情変える気配なし。自分がアホらしく見えてきた。

「おい！長谷部！白石！お前ら真面目に話を聞け！聞かないから外へ出る！帰ってくるな！」

： 人生初。怒られたの。

えーん。悲しいよー。

「はい。すみま「すみません。聞く気が湧かないようなので外へ出させていただきます。」

謝ろうとした私を遮り、さらっと白石が言う。もちろん無表情。そして立ち上がると凄い力で私の腕を掴みドアへ向かって歩き出した。

！??？

いやいや。おかしいから！普通謝るでしょ！聞いたことないよ、そんな風に言い返す人！！

てか

みんなの視線が痛い。痛い。痛い。痛い…それもそうか私こんな状態だし！って

離してよおー！ー！ー！！

廊下に出てもなお引きずられている私。

「痛いよ。離してよ。私、白石となんも関係ないじゃん！」

「……」

「だからね、…」

白石が何も言っでこないのを良いことに私はひたすら奇声をあげた。

でも、どんなこと言っても無表情。ずんずん歩いて行っちゃう。

「……」

自分ばかり言っでいて馬鹿らしくなりしゃべるのをやめた。

！！！

そこではじめて気づく。…何時の間にか二人は資料室の前に来ていた。

勝負

「入ってください。」

半ば強引に資料室に入れられる。室内は沢山の古い本とそれに囲まれて茶色い大きなソファが置いてあるだけ。

「座って下さい。僕は貴方のことを歓迎しますよ。」
「……」

なんなのこいつ。さっきまでウンともスンとも言わなかったくせに、急に喋り出して。

「何でうつむいているのですか？もしかして、僕の態度でしょうか？急に喋り出してムカつく。とか？」

白石が窓側のカーテンを閉める。

えっ。なんでわかるの？気持ち悪っ！

「なんでわかるのかって？あなたの顔に全て書いてあります。」

そう言つて振り返ると私の顔を人差し指で指した。

「まだまだ休み時間まで暇です。何をしましょうか。黙っているだけではわかりません。」

いつのまにか私の隣に腰掛けている白石。こっちを見てるのがわかるけど、なんだか怖くて目を合わせられない。

くるっ。

白石を背にするように向きを変える。

何話せばいいかな。会話続かなそうだし…

そうだ。

「ねえ。なんでいつも無表情なの？」

ずっと気になっていた事だ。

「やっと話し出すと思ったらそんなことですか。僕は貴方と違ってなかなか表情が変わらないんですよ。」

依然として白石に背を向けたまま。

「好きな人の前でも？敬語も変わらず？」

ついつい聞きたかったことを口に出してしまう。そもそも女たらし

に本命はいるのだろうか？

「そうですね。変わらないでしょうね。時々、敬語は変わりますが。」

「好きな人いるんだ。思いますってことは片想い？意外。白石でも落とせない人いるんだ。」

なんか新しい白石を見つけたようでちょっと面白い。可愛いところもあるんだ。

「……」

「ごめん。変なこと言っちゃたかも。」

「……」

ヤバイヤバイヤバイ。背中がチクチクしてるし。絶対睨んでる！

「……」

どうしよう。怒らせたよね？ただでさえ無表情で怖いのに――！！

「…ねえ。こっちを向いて下さい。」

「はい。」

ゆっくりと振り返る。予想通りいつもより少し鋭い目元になってい

る。なにをするのだろうと思いきや

「勝負、しません？」

ほへ？

なんの話？

怒られると思ってたからちょっと安心。だからか口から出たのは、

「うん。いいよ。」

と素直に従う言葉。

「僕の好きな人を今日の放課後までに当てる事が出来たら君の勝ち。当てられなかったら君の負け。負けたら僕の手伝いしてもらいます。」

はあ？無理に決まってるでしょ！？無理無理無理！だいたい手伝いつてなによ？

「いいですね。明日の放課後、待ってるからここにきて答えを聞かせて下さい。逃げたら、タダじゃ許しませんから。」

…白石ならとんでもない事もやりかねない。クラス全員が私の敵になることだって十分あり得る。

「わかった。わかった、やるよ!」

仕方なく承知する。なんとかなるだろう。最悪、手伝いをやればいいんだ。

「あと、二時間頑張ってください。では。」

ボタンっ。

あいつ————!!!!

始まり

――再び資料室。白石を待っている。

来なかったら許さないと言ってたくせに自分が遅いつて。

そんなことはどうでもいい。

二時間、久しぶりに頭フル回転させて頑張ったけど結局わからず。

まあ、わかる方がすごいのはわかっているけど。

やっぱ最有力候補は山田詩織ちゃんかな。一番白石に言い寄ってるし白石もそれに受け答えてるし。

今日も腕を絡ませてキャッキャッ言ってた。付き合ってるようなもんでしょ。

クラスのアイドル。モデル並の真っ白な肌にはっちりお目々&アヒル口の最強なお顔の持ち主。

なーんか、そう考えるとお似合いだな。あの二人。

頭の中で二人が手を繋いでるシュミレーションをしてみる。

手を繋いで街を歩く二人。行く人行く人が美男美女カップルに振り返っていく。

「はあー。似合ってる。」

思わず口に出る。

「何がですか？」

：

えっ？

「僕の事を心待ちにしていると思ったら妄想中だったとは。残念です。」

ふうー。

白石が大袈裟にため息をついてムカつく。

「で、わかりましたか？」

全然残念そうじゃないし。もう立ち直ってるし。

「わかりましたよーだ！山田さんでしょ？詩
織ちゃん。二人がよく話ししてるからすぐわかりましたー！！」

ふんっ。

さっきまでのシュミレーションにより自分の答えに自信がついた。

…

…

「お手伝い決定ですね。お疲れ様です。」

そう言うなり、ドアのそばにいた白石がずんずん近づいてきた。

「えっ！？だって、超イチャイチャしてるじゃん！」

必死で理由を述べる。

「顔もタイプじゃないし性格もダメ。勝手にアプローチして来るから適当に流してる。以上。」

ひどっ。

可哀想だな。山田さん。

そんなことを考えていたら白石があっと言う間に私の目の前に来ていた。

黒縁メガネの奥にある大きな瞳に見据えられた私は動けなくなった。

「約束通り、“手伝い”してもらいましょうか。」

耳元で白石が囁く。

“手伝い”

私には何故か、それがとんでもない事の始まりに聞こえた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7409y/>

ポーカーフェイスな彼

2011年12月9日23時51分発行